はしるはしる、わづかに見(上一・用)つつ、心も得(打消「ず」用)ず、(下二・未)
(副詞)(形動・ナリ・用)
心もとなく思ふ(四段・体)源氏を、一の巻よりして、人もまじら(四段・未)
(形・ク・用)
ず、几帳の内にうち伏し(四段・用)て、引き出で(下二・用)つつ見る(上一・体)心地、
(きちやう)
打消「ず」用 接頭語
后の位も何にかはせ(サ変・未)む。昼は日暮らし、
(きさき)
係助 意思「む」体 副詞
夜は目のさめ(四段・用)たる限り、灯を近くともし(四段・用)て、
存続「たり」体
下二・用 形・ク・用
これを見る(上一・体)よりほかのことなければ、おのづから
形・ク・已
などは、そらにおぼえ浮かぶ(四段・体)を、いみじきことに思ふ(四段・体)
形動・ナリ・用 形・シク・体
に、夢に、いと清げなる僧の(格助詞(同格))、黄なる地の袈裟(けさ)着(上一・用)
形動・ナリ・体 形動・ナリ・体
たるが来(カ変・用)て、
存続「たり」体
(ほけきやう)
「法華経五の巻をとく習へ(四段・命)。」
形・ク・用
と言ふ(四段・終)と見れ(上一・已)ど、人にも語らず(四段・未)、習はむ(打消「ず」用 意思「む」終)とも思ひ
四段・未 下二・未
かけ(打消「ず」終)ず。物語のことをのみ心にしめ(下二・用)て、
「われはこのごろわろき(形・ク・体)そかし(係助 終助)。盛りにならば(四段・未)、容貌
(かたち)
も限りなくよく、髪もいみじく長くなり(四段・用)なむ(推量「む」終)、
形・ク・用 形・ク・用 形・シク・用 形・ク・用 強意「ぬ」未
光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君のやうに
こそ(係助)あら(ラ変・未)め。」
係助 推量「む」已
と思ひ(過去「けり」体)ける心、まづいとはかなくあさまし。
四段・用 形・ク・用 形・シク・終

胸をわくわくさせて、ほんの少しずつ読むだけで、
内容もよく理解できず、
もどかしく思っている源氏物語を一の巻から自分
一人だけで、
几帳の内側で俯いて取り出して見る気持ちは
お后の位も何になろうか(と思われるくらいに素
晴らしい。)昼は一日中、
夜は目が覚めている限り、灯を近くにともして、
これを見る以外に他のことはしなかったので、自然
と名前などはそらで覚えて頭に浮かぶのを、
たいへん素晴らしいことだと思っていると、
夢にたいへん美しい僧で、黄色い生地の袈裟を着
た僧が現れて、
「法華経の五の巻を早く習いなさい。」
と言うのを見るけれど、人にも言わず、習おうとも
思わなかった。物語のことばかりが心の中にいっぱ
いで、
「私は今は容貌が良くないが、年ごろになれば、顔
もこの上なくよく、髪もきっとたいへん長くなる
だろう。
光源氏の夕顔や、宇治の大将の浮舟の女君のよう
になるだろう。」
と思っていた心はまた、たいへんたわいもなく、
あきれたことだった。

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/